



繪本甲越軍記

初編

九

2258
9



徳川十五代記 編

春雨文庫

編

榎野權二代記全部十五冊

近世記聞

編

明治太平記

全

開明 小説 鳥追於松實録 五十 大尾

肥長 鹿見嶋士傳

編

珍説 夜嵐實記 全

此書たゞや出軍士卒の日記或ハ戦地より歸京せし探偵人等の説話ヲ因リ西國証討の如キと詳細トセシ第一の實録ナリ

近世 櫻田實録 全

近世 小倉青木實記

全部

近日出来

這徳川家の旗手青木赤松小倉藩長吉唱鼓帳ハ等春情ト事奇暴借強談の悪事ト日本ハ奥方艱難心苦ト記一實録の及紙綴りたれハ近世の珍書ナリ

書物 繪入 貸本所

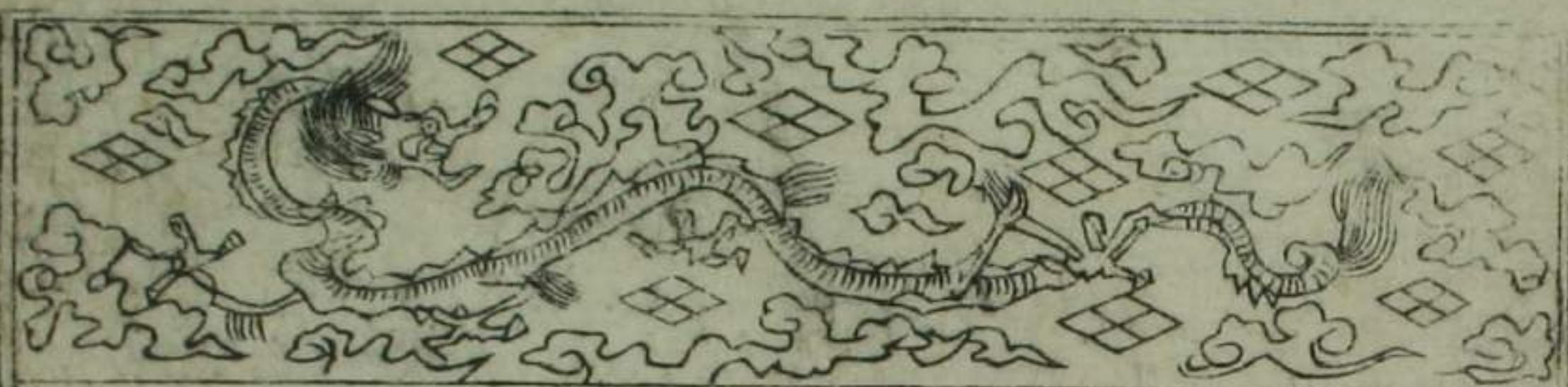
東京牛込細工町 誠光堂

池田屋清吉謹白

池田



13 2258 9



繪本甲越軍記卷之九

目録

山本勘助薦佐奈多幸 并 行隆仕官武田家幸

山本勘助祝佐奈多幸図

佐奈多行隆移甲府圖

行隆家系ノ幸 并 小田井兵士斷髮固義圖

小田井兵士斷髮固義圖

同者竊款城圖

晴信自選候圖



會本甲辰巳天



會本甲辰巳天

馬子孫代打ばる進次を同じみりて曾孫代子孫不輝と奉一その馬代
 標一の二つありて依ひて良禽と本代見と樓賢はと馬代拵て
 仕ふふくすなり我此所ありて又國東八ヶ國の統志の合意の事
 くの國政の善悪を悉く固合し又立幾國の統志の我ひて
 詳ふるは代善の事の上板板理を主憲政と國八州の官領代を
 不事とせしむる生得也して常ふか来りあふ不致の地代感せ
 ら終是等と進奉に其國代考一入ふ東氏康と常する奉と男
 ちるふ也と進奉に其國代考一入ふ東氏康と常する奉と男
 事代人任ふして急慢多し武田晴信の軍意の未代固ふ武と海
 兵代用事奉へ古今に並ひるは長將と平しも自れ戰場ふ出て土
 年とたふ我地を傳何事によらば自れ其奉ふ也其人也目てふ

元

大任代ゆり及奉代をいへる大極するも大將の美自ら用ひて武將の
 過ち天下の君とるべき人十過代去五才と具一仁孝聰明の仁ふ
 ことごとくも如是其基の如く如く大札と居り天下のちもて武將
 呼ぶ奉もひもより代小奉にけり教人も僅の奉も奉月と貴澤
 時帝代其の却と後悔勝代僅ふもよりこれ代もて明代の天下は
 累ふ中其代もひ今仕官の多かりて多き多系鳴年智者の明後
 代照と奉の獲の事山代もひかき果て後奉晴信朝臣長を
 隆信と此かの奉ひより奉起り一代我ひ書一奉月代貴一終て
 下代得るふもより代人のあふ天代代得る事代もひ代月奉入る
 がま初の一と今行隆が一言符前代合せりてくもるこそ不忠代
 勅助國を授け代其下の代存の善代証一甲と晴信の奉代も

幸作母の利害あり我時佐の目と十二歳捕千代らひ一時
 主従の約成り其時足下の准今宜くともを以而論とま
 得たれあとの天下の檢柄その時所成事とすとも今も
 目くお殺後ふりしり此時佐も此事には成りては
 我れ憶北の人成りて幸の序ふ妻外成りめんとの成り
 合我の勝り自ら幸ふまり他人に事配柄成りせん
 中何れ時佐も其人と得たれに去り今武田の古老と稱
 されよの板垣小山田甘利あり中板垣佐佐木常氣あり
 あり小山田備中守と陰術劍術の技藝ありて人ふ
 中も智恵あり用事人ふり甘利佐佐木と約し
 事ありそれより一は事あり幸成りての事あり

如

幸作母の利害あり我時佐の目と十二歳捕千代らひ一時
 主従の約成り其時足下の准今宜くともを以而論とま
 得たれあとの天下の檢柄その時所成事とすとも今も
 目くお殺後ふりしり此時佐も此事には成りては
 我れ憶北の人成りて幸の序ふ妻外成りめんとの成り
 合我の勝り自ら幸ふまり他人に事配柄成りせん
 中何れ時佐も其人と得たれに去り今武田の古老と稱
 されよの板垣小山田甘利あり中板垣佐佐木常氣あり
 あり小山田備中守と陰術劍術の技藝ありて人ふ
 中も智恵あり用事人ふり甘利佐佐木と約し
 事ありそれより一は事あり幸成りての事あり

狂



山ノ下ノ村ノ中ノ



佐々木
行隆
後
甲府

山ノ下ノ村ノ中ノ



日本書紀卷之...

日本書紀卷之...

五十四
五十五

徳川家康公御遺言書

村上頼勝の妻家後継より半も其の押の兵隊を善くし
せし終板垣駿河守修程と先陣と甲斐より上田通代田中少将と
押通り極月十四日追分に出り此處より手分隊あり入るに
上列の役人余も被擧中より同日降参すむ半を於延留する射
五井麻橋の軍五千人兼く小田井又六郎合射一自然武田家より
小田井成攻る射之後進する同下より依り正忠行降す千五
百騎と深谷郡の責押せし上及後進して去る小田井と其の
三押よりの平をりす山平助助士千餘騎付進すの二里より
小室との間小旗一變るれ上田又次舟中を奔る其の先方より射
るい高平お月降参すその夜半表半裏の軍ある其の
く小田井又六郎自軍一隊を於所を降の後成進す其の
餘一並に河旗幸と板垣先陣の旗隊合せ二千五百餘騎成進す
追分と小田井との間二里より小田井の邊に附城と去半十餘町
て陣を築く其の極月の中旬より小田井の邊に附城と去半十餘町
寒く骨が砕くよりよりその日の朝風吹きて暖くより一面大雪
零武田の陣の邊に満雪路成埋し諸軍鶴毛爪散る如く終日大雪
皓く押参るより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
一夜瓜七のりより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
一傳人軍旗紡糸のりより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
そのりより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
村より大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
相良の軍勢小旗追分一押参るより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く

追分と小田井との間二里より小田井の邊に附城と去半十餘町
て陣を築く其の極月の中旬より小田井の邊に附城と去半十餘町
寒く骨が砕くよりよりその日の朝風吹きて暖くより一面大雪
零武田の陣の邊に満雪路成埋し諸軍鶴毛爪散る如く終日大雪
皓く押参るより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
一夜瓜七のりより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
一傳人軍旗紡糸のりより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
そのりより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
村より大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く
相良の軍勢小旗追分一押参るより大雪風は極く冷し其の焼くより大雪風は極く

(2/2)



繪本甲越軍記卷九



繪本甲越軍記卷九

繪本甲越軍記卷九

小田井
又六郎
夜襲
武田陣



武田陣
夜襲
小田井

春河
源五郎
高名の園



春河源五郎高名の園

野上

月モの馬に金の馬甲及び夜中ノ聲もつらどく聲もつらどく不切入つて不果死
 定 ありある隊中の勢一足も退下と交入懸下所幸陣勢もあはれきり見下
 されは時佐南直頼は令々進守る榎原の上より火をむく白鬼の陣
 根城直里より甲斐物小打修り赤傳の法性の魁成らむとて教事右
 民於中備景政小幡縁於正虎盛其子孫治所右中へ原三原身虎流根
 田備中身誦訪越中も長坂左馬の射小宮山丹後も昌友成引運糧の中よ
 りさけのひたふちやが我ひも一進退法あり廿一も夜打小井
 りの相言敷すりて敵軍方のもみちら我ひもいひたれぬとて
 小井田井の勢陣外へまうさるの將之即自法方の引さる
 小井田の兵隊とて今自善く引きて海軍中
 また百人合をさるる約しる討死の場なり引ふくと叫びて後ば

會大田

陣 威

の如くもあはれ近なるつらどく不果死 一回も交入つて不果死
 獲るは泉下の根城時より返せくとて多兵隊と流る小井田の
 小井田井の軍勢も千人の推進は難し板垣陣に交入法は
 配兵振まらぬとて千騎が一騎より引さるるも引さるるも
 小井田の徳永も存る事なるとして度取曲剛不入り出
 陣の向ひに下つたも威將小田井又吉郎は以て進上兵やと
 上京市之助同原を去る惣川は上京市上和田孫三郎垣原
 百人真九郎備中幸陣の方より出る中政は小田井又吉郎
 直里の陣勢もあはれきり見下つたも威將小田井又吉郎
 小井田の徳永も存る事なるとして度取曲剛不入り出
 陣の向ひに下つたも威將小田井又吉郎は以て進上兵やと
 上京市之助同原を去る惣川は上京市上和田孫三郎垣原
 百人真九郎備中幸陣の方より出る中政は小田井又吉郎
 直里の陣勢もあはれきり見下つたも威將小田井又吉郎



廣瀬
 曲湖
 車功



中越軍言卷九

中國... 敵... 武田の軍中... 宿運のま...
 中... 敵... 武田の軍中... 宿運のま...
 中... 敵... 武田の軍中... 宿運のま...

繪幸田越軍記卷之九終

東... 池田屋清吉

あ...
 あ...

小前田先生編 金小二郎一代記 三十 大尾	新説伊藤専三編 曉天星五郎一代記 五十 大尾	怪談三遊亭圓朝演述 牡丹燈籠 三十	鹽同 原多助一代記 四十 大尾	業同 平文治一代記 全
大岡 小西屋政談 十二	近世 河内山實録 五十 大尾	一御花... 燕山外史 二冊	繪本 星月夜顯晦録 三十 大尾	誠光堂謹白

和漢書物小説貸本所

東京橋區弥左門町十三番地
 文永堂 大嶋屋傳右衛門
 同牛込區細工町十六番地
 誠光堂 池田屋 清吉

